

Interview Extra

理事長インタビュー

ひかり輝く全人教育 ～「一人は一校を代表する」を生活目標に～

文部省のご勤務から1968年に須賀学園に戻られて以来、現在もお元気に勤務されている須賀 淳先生(須賀学園理事長)に、長坂キャンパスの温故知新をお伺いしました。

1964年、須賀友正校長先生が高校に音楽科を設置されました。全国的にも先駆的な試みだったことでしょう。

全国でも約10校しかなかった高校の音楽科を、本校で初めて男女共学で発足させたことは、まさに画期的なことでした。当時、文部省では高校教育の多様化を推奨していて、初等中等教育局の初等教育課長の私は、父と音楽科設置を構想しました。友正校長は自らピアノを弾き作曲も得意で、音楽への憧れは人一倍でした。明治33年に栃木県内最初の私立の女子教育機関として創立された本校ですから、芸術の香り高い音楽科を加えることには、私も大賛成でした。

高校総体、国体、全関東という三大会制覇を達成したソフトボール部の快挙に次いで、1962年には発足4年目のオーケストラ部がNHK全国器楽コンクールで第2位を獲得したことも後ろ盾にありました。先生も生徒もよりレベルの高い演奏指導を求め、それに応えるべく第一線で活躍の音楽実技の先生方を招聘し、音楽科が誕生したのです。

それより先、長坂にグラウンド(現 長坂キャンパス)を開設し、宇都宮短大の創設を準備されていた当時の様子は。

高校から4kmの丘陵地で、高い丘の緑の美しさや見晴らしの良さに魅かれて、将来、音楽や幼児教育を専門とする高等教育機関を設置しようと、10年ほど前から準備をしていました。グラウンドを開設した1965年、秋の大運動会を長坂キャンパスで開催したことを、今でも鮮明に覚えています。

高校には音楽科のレッスン室と練習室を備えた特別校舎(3号館)を新築し、短大創設についても物心ともに着々と準備を進め、審査が厳しい文部省の設置認可のために度々上京する父と、二人三脚で努力しました。長坂キャンパスには、当時と変わらない豊かな自然環境が維持され、現在「こどもの森」やキャンプ実習にも活用されていることは、とても嬉しいことです。

1967年の3月に高校音楽科の1期生卒業に合わせて、宇都宮短期大学音楽科が開学し、須賀友正先生が初代学長に就任されました。



須賀学園
理事長 須賀 淳

昭和24年東京大学を卒業。文部省に勤務。文部大臣秘書官、初等中等教育局教科書課長、初等教育課長などを歴任し、昭和43年須賀学園に戻る。栃木県私立中学高等学校連合会長、栃木県公安委員長などをつとめる。

3年前に発足した高校音楽科は、各種コンクールや芸術祭で表彰された中学生に対する熱心な募集活動も功を奏して、優秀な生徒が集まりました。その実績から、高校卒業生を受け容れるための宇短大音楽科の創設に弾みがついたのです。

高校音楽科の卒業生は約半数が宇短大へ入進学し、半数は東京藝大はじめ有名音楽大学へ進みました。この比率は半世紀を経ても、変わっていません。現在は、宇短大から海外留学や東京の4年制難関音大への編入学者も増えています。高校・短大の音楽科卒業生が、全国はもとより世界へと演奏活動や教育活動の場を広げてきたことは感慨無量です。

友正校長は、「教科の学習はもとより、文化面、スポーツ面へと私の思いは連なっていく」と話し、「強く、美しく、朗らかに励もう」と学生生徒に目標を掲げていました。

淳先生が、副校長として1968年夏に文部省から学園に戻られ、9月には学校名を須賀高等学校から宇都宮短期大学附属高等学校に改称されました。

校名変更は、須賀学園に当時数少ない高等教育機関である短大を設置したことを世間に示すとともに、名実ともに新しい時代のニーズを切り開く高等学校として脱皮を図ろうと考え、決断しました。学園にとって大きなエポックとなりました。文部省海外教育事情視察団の団長として欧米各国をめぐり、特に米国の高校において多様な教育が行なわれていることに注目した経験が大きかったと思います。

音楽科に次いで1970年には、栃木県に先鞭を付けたいという思いで、高校に調理科を新設しました。厚生省へ50人定員で申請し募集したところ、150人に上る受験生があったことはうれしい悲鳴でした。



文部省から須賀学園に戻られた昭和40年代の授業風景

1985年に、長坂に須賀友正記念ホール(2号館)を増築。第2代学長の淳先生はアコーディオン、電子オルガンやオーディオ機器を駆使して、音楽に親しまれておられます。音楽ホールの建設に関しても、相当に研究されたことでしょう。

1982年に亡くなった宇短大創立者の須賀友正学長を顕彰して建てられたこのホールは、日本一のクラシック環境を目指して、NHKの技術研究所に音響設計を依頼しました。

国内外から訪れる有名演奏家がこの宇短大のホールを絶賛するたびに、NHK技術研究所に日参した労苦が報われる思いです。同じくNHK技術研究所に音響設計を依頼して、1988年には附属高校にも須賀栄子記念講堂を新築しました。世界の名器であるスタインウェイピアノとベーゼンドルファーピアノ、国産のヤマハとカワイのコンサート用フルコンをそれぞれのホールに備えました。各メーカーによる世界最高峰のピアノの音質の特徴が、私の耳にも良く分かりました。

同時期に栃木県交響楽団、その後に栃木県オペラ協会の会長にも就任されていますね。

学園は地域の音楽団体との関わりも深く、1970年に発足した栃木県交響楽団の会長を初代会長の父から引き継ぎ、また1999年には県内の2つのオペラ団体を一体化した栃木県オペラ協会の設立にあたり、会長としてその発展に努めました。

学園創立100周年を迎えるにあたり、1999年に那須大学(現・宇都宮共和大学)を創設されました。その狙いは。

私は21世紀の激しい社会変化に対応できる、個性ある創造的・国際的な人材養成が必要と考えていました。折しも、那須が国会で首都機能移転のトップ候補地に決定され、これを受けて栃木県や那須塩原市等から学園に大学設置の要請があり、全国初の都市経済学部を有する那須大学を開学しました。

その後、国において首都機能移転が見送られたことから、学園では那須キャンパスは維持しつつも、2006年に大学本部を宇都宮市中心市街地(宇都宮シティキャンパス)に移転し、須賀学園創立時の校名を復活して宇都宮共和大学と改称しました。

この新しいシティライフ学部は、都市の生活・経済・まちづくりを学ぶ先駆的な学部として、評価を得ていることは嬉しいことです。

2001年に宇短大人間福祉学科が発足し、音楽と福祉を総合的に学べる短大に発展しました。

インタビュー後記

学生生徒の生活目標として掲げられている「一人は一校を代表する」は、私にとっても宝物の言葉です。

この目標を学園全体で邁進してきた半世紀こそ、建学の精神「全人教育」の実践であり、個性豊かな学生生徒を育んできた歴史であることを、このインタビューで実感しました。フランクにお話くださった須賀淳先生に、心から御礼申し上げます。



インタビュー
宇都宮短期大学 音楽科 学科長・教授 直井 文子
足利市出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科第3期生。桐朋学園大学ピアノ科を卒業と同時に本学へ着任し、これまでに多くの演奏家や音楽指導者を社会に送り出している。

高齢社会が急速に進み、福祉の専門職を養成することが国家の政策となりました。附属高校生徒の福祉ボランティア活動を見て、この場にこそ「全人教育」を必要とすることを痛感し、人を知ることにより重点を置き、人間福祉学科(社会福祉・介護福祉専攻)を設置しました。短大に音楽と福祉が揃ったことで、「豊かな心」「豊かな暮らし」に向けた創立当時の構想が実を結びました。

2004年に英之先生が第3代学長に就任されました。幼児福祉専攻や音楽療法士専攻から宇都宮共和大学子ども生活学部まで、革新の年月でした。

長男の英之が学園に戻り、4年後に学長職をバトンタッチしました。英之は経済が専門ですが、学生時代から色々な楽器に親しみ、スポーツにも熱心でした。嫁も国立大学の教授で大学を身近に見ていたこともあり、スムーズにバトンタッチできました。

2003年に少子化に向けて宇短大人間福祉学科に幼児福祉専攻を、また2005年に福祉との融合を考え音楽科に音楽療法士専攻を設置しました。幼児福祉専攻は、音楽科の強力なバックアップもあり実績を伸ばして、2011年に宇都宮共和大学子ども生活学部が発展しました。福祉や保育の現場で、卒業生がすでに中堅として活躍していることは心強いことです。

その後、宇短大音楽科には邦楽専攻を加え、2018年には吹奏楽・アンサンブル専攻が新設されます。アンサンブルホールの新設やこどもの森の整備も進み、隣接地に須賀学園第4グラウンド(硬式野球場ほか)も完成しました。長坂キャンパスの展望をお聞かせください。

母の須賀華子が三味線や長唄などの邦楽をたしなみ、私は幼い頃からその音色を聴いて育ったので、邦楽専攻の設置は念願でした。一方、附属高校吹奏楽部は、毎年コンクールで好成绩をおさめていますので、吹奏楽指導者を育成する吹奏楽・アンサンブル専攻にも大きな期待を寄せています。

長坂キャンパスの開設以来半世紀を経て、私が文部省在職時からの構想であった人間社会にとってかけがえのない「音楽」「福祉」「保育」にかかわる教育の道筋が揃いました。共通する教養は、学園創立者の須賀栄子先生が教育の根源に置いた一人ひとりの個性・能力・特性を最大限に伸ばす「全人教育(人間形成の教育)」に他なりません。

これからも伝統と先進を両輪に、教職員と学生がお互いに信頼し合い、あたたかな校風のもと優れた教育研究を進め、卒業生には輝かしい人生を送ってほしいと心から願っています。